

## LUI「公募研究」成果報告書

研究課題（和文）：古典伝統における詩と社会—古代ギリシア・ローマ、中国そして日本の比較研究—

研究課題（英文）：Song and Society in Classical Tradition -Comparative Studies of Ancient Greece and Rome, China and Japan-

申請者名・所属先：葛西康徳（人文社会系研究科）

海外招聘者名：ヴァネッサ・カツアート（Vanessa CAZZATO）

### 1. 研究の目的

本研究は、古代ギリシア・ローマ、中国そして日本の古典文学伝統における詩（歌）を、それが創作・実演される社会的な場および制度（しきたり）との関係で総合的かつ比較的・相対的に把握することを目的とする。

### 2. 研究開始当初の背景

これまで申請者は「説得（persuasion）」の視点から古典文学作品をホメロスからプラトンまで幅広く分析してきたが、詩は「説得」の最も重要なメディアである。古代ギリシア・ローマの詩は、近現代の詩とは根本的に異なり、特定の社会的場と制度に従って、音楽や舞踊（ダンス）を交えて実演されるものである。欧米では主流である「パフォーマンス」として詩を分析するという視点から日本人に期待されるのは、日本および中国における伝統古典文学（短歌、長歌、俳句）における詩と社会の関わりについての研究、つまり一種の比較研究なのである。かかる比較研究は海外の研究者によって若干なされているが、我国では皆無であった。

このような状況において申請者は大学院多分野交流演習において過去四年間、西洋のみならず日本および中国古典文学専門の同僚諸氏（藤原克己教授、小島毅教授等）と共同研究を行ってきた。また、文学と社会・法制度の関係に関して、法学政治学研究科の新田一郎教授が本演習に毎回参加している。本演習の成果の一つとして、能とギリシア悲劇の比較研

究を最初に行ったのは、東京大学文学部の最初の哲学教師フェノロサなのである。彼は、能の中で引用される短歌の翻訳（英訳）から能自体に興味を持ち、やがてそれが欧米のギリシア悲劇研究自体に多大の影響を与えるのである。ホメロス（叙事詩）と平家物語の比較研究は内外に存在するが、抒情詩との比較研究は皆無である。

このように、本研究は人文社会系研究科、法学政治学研究科、総合文化研究科の西洋、中国、日本を専門とする研究者による極めて学際性の高い国際的研究である。

### 3. 研究の方法

本研究を国際的研究として確立させるために、ナーヘン大学のヴァネッサ・カツアート氏を招聘した。カツアート氏は、主に抒情詩と社会に関する総合研究を推進している。氏は2014年8月、スイス（ジュネーブ）にある古典学研究所にて申請者が主催した『オデュッセイア』に関する国際シンポジウムに招聘した経験があり、また私が2019年8月に主催してオックスフォード大学で実施している「古典学と法学」に関する「体験活動プログラム」において「Song and Society」コースを担当することになっている。本研究では、カツアート氏にはギリシア抒情詩と饗宴（シンポジオン）の関係及び、日本の古典文学と茶道その他と社会制度との比較を担当してもらった。

### 4. 研究成果等

#### 第5回 HMC オープンセミナー

日本の古典文学と古代ギリシア文学の比較—詩歌と社会の視点から—ギリシア悲劇と能

- 日時：2018年12月14日（金）17:00-19:00
- 場所：東京大学東洋文化研究所 第一会議室
- 報告者：葛西康徳（人文社会系研究科・教授）、末吉未来（人文社会系研究科博士課程）
- ディスカッション：菅原克也（附属図書館副館長、総合文化研究科・教授）
- 概要：報告者は、大学院人文社会系多分野

交流演習『東京大学草創期の授業再現』(2014-2018)を担当する中で文化転移(Cultural Transfer)について考察してきた。その過程で明らかになったのは、学術の伝播を単一の Recipient の立場から見た Donor からの継受(Reception)として論じるのではなく、Donor の視点から複数の Recipient に対する普及(Diffusion)として捉えるべきことである。さて一般的に言って、日本は西洋の学問を継受(Reception)してきた。では、日本が西洋に対して Donor になった例はないだろうか。本セミナーは、John Gould (1927-2001) のギリシア悲劇研究から出発してフェノロサとノエル・ペリの能研究に遡った。一方で久保正彰(西洋古典学研究室・名誉教授)と東京大学ギリシア悲劇研究会(「ギリ研」)の事跡をたどり、文化転移を重層的に論じた。特に「ギリ研」の活動については、共同して研究を行っている末吉未来氏から報告した。本研究に対して、比較文学を専門とする菅原克也氏(総合文化研究科)から有益なコメントを頂いた。記して感謝申し上げたい。

#### 第7回 HMC オープンセミナー

##### On Experiencing Japanese Nō and Thinking About Greek Lyric (能の体験とギリシア抒情詩の考察)

- 日時：2019年2月8日(金) 17:00-19:00
- 場所：東京大学 東洋文化研究所3階 第1会議室
- 報告者：Vanessa Cazzato (人文社会系研究科・外国人研究員)
- コーディネーター：葛西康徳(人文社会系研究科・教授)
- 使用言語：英語(一部、日本語)
- 概要：西洋古典学分野において能とギリシア悲劇の比較は、伝統的に、諸学者が対話する研究の王道であった。この報告は別の進路をとって、この踏みならされた道を離れる。その進路とは、ギリシア抒情詩という文学ジャンルにおいて比較による対話のための新たな研究領域を導入することである。ギリシア抒情詩とは演じられる詩の一形式であり、前650-450年ご

ろギリシア世界において花開いた。ギリシア語で最も優美かつ最も高名な詩文のいくつかを生み出したものの、それを上演するための社会的・文化的環境がもはや維持されなくなったとき、ギリシア抒情詩は消滅してしまった。今日現存するものの大半は、文献学者に挑戦をつきつけるようなテキスト断片群でしかない。この詩文の集積を解釈すべく行われてきた主な試みの一つは、演劇としての側面を復元すること、そしてこの復元が我々の原文読解を活性化するような仕方を理解することにある。本報告では、演じられる抒情詩の日本的なかたち、すなわち能を生身で経験することがギリシア抒情詩の考察に新たな方法を触発する仕方について、いくつかの見解を示した。

- 本研究プロジェクトを基にして、以下に示すように、二つのシンポジウムが開催される。最初のシンポジウムは本年2月、申請者が関与する科学研究費に基づく共同研究との共催で行われた。もう一つのシンポジウムは2019年8月、Archive for Performance of Greek and Roman Drama ([www.apgrd.ox.ac.uk/](http://www.apgrd.ox.ac.uk/)) が存するオックスフォード大学古典研究センターにて開催される。これらの成果は英文で発表される予定である。
- 本研究とも関連する東京大学草創期における西洋の諸学問の受容史(普及史)研究は、東京大学大学院人文社会系研究科における多分野交流演習の成果報告書として公開された。

#### 5. 主な発表論文等

[図書]

[雑誌論文]

- 'On Experiencing Japanese Nōh and Thinking About Greek Lyric', in *Tokyo Classical Review*, (『東京大学西洋古典学研究室紀要』査読有) 2019, vol.12, 53-81

[学会発表]

## I: Comparative Studies on Greek, Roman and Japanese Theatre and Lyric Poetry

Department of Greek and Latin Classics

Faculty of Letters Building 3,

7th floor University of Tokyo

(Hongo Campus), 13:00-18:00 15<sup>th</sup> February, 2019

### 【Programme】

0. Yasunori Kasai, Opening Speech.

1. Yasunori Kasai, 'Karl Meuli on Mask'.

2. Miku Sueyoshi, 'History of Tragic Studies in Japan: Irresistible Attraction between Tragedy and Noh'.

3. Suzuha Nakamura, 'Reconstructed Noh: Westernization as a National Goal'.

4. Yoshiji Yokoyama, 'The Status of Actors in Ancient Rome, in France and in Japan — Around the Notion of "Grace of Acting"'.  
— Coffee Break [15:10-15:30] —

5. Hitoshi Yoshikawa, 'Ernest F. Fenollosa and Noh: On his Experience'.

6. Hiroshi Notsu, 'Rigid Structures of Greek Tragedy and Comedy: are they Comparable to those of Japanese Lyric Drama Noh?'.

7. Emi Matsumoto, 'Sugiyama Naojiro's Introduction to Peri's Noh'.

8. Vanessa Cazzato, 'Some Reflections on Greek Lyric and Japanese Noh'.

Supported by LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative and JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research

(C) (17K02590 "Reception and Diffusion of the Japanese Performance of Ancient Greek Drama")

協賛：LIXIL 潮田東アジア人文研究拠点及び日本学術振興会 基盤研究(C) (17K02590)「日本におけるギリシア演劇の受容と世界的発信に関する実証的総合研究」

## II: Symposium: Comparative Studies of Greco-Roman and Japanese Theatre and Lyric Poetry,

on the 16th of August 2019, at Oxford Classics Centre, from 2 to 5 p.m.

### 【Programme】

1. Yasunori KASAI [14:00-14:30]

General introduction and his paper

"Why Japanese classical (both Japanese and Greek and Latin): Scholars are unable to pursue comparative studies?"

2. Adele SCAFURO [14:30-15:00]

"Recognition Plays in Greek and Japanese Drama" or "Unravelling a Plot in Greek Tragedy and Kabuki"

3. Vanessa CAZZATO [15:00-15:30]

"Noh and Greek Lyric"

4. Hiroshi NOTSU [15:30-16:00]

"Fixed Structures of Ancient Greek Theatre and Japanese Lyric Drama Noh"

5. Maxime PIERRE [16:00-16:30]

"Un récit venu d'ailleurs: comparaison entre le récit de l'acteur d'aikyôgen dans le nô et le récit du messager des tragédies de Sénèque"

6. Free Discussion [16:30-17:00]

[その他]

報告書

- 葛西康德編『多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集 2014-2016』（東京大学大学院人文社会系研究科 2017年3月）
- 葛西康德編『東京大学草創期とその周辺』2014-2018年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集（東京大学大学院人文社会系研究科 2019年3月）